

# The Japanese Association for Metastasis Research

NEWSLETTER Vol. 46

- 第25回 学術集会のご案内
- 第24回 学術集会/総会を終えて
- 第24回 総会報告
- 寄稿 岡田保典功労会員
- 第19回 研究奨励賞受賞報告
  - 坂本 毅治 (東京大学医科研)
  - 泉 浩二 (金沢大学泌尿器科)
- 会則/役員選任規程/役員名簿/変更届



日本がん転移学会

URL : <http://jamr.umin.ac.jp>

# 第25回日本がん転移学会学術集会/総会の開催にあたって

会長 清水英治（鳥取大学医学部 分子制御内科学）

この度、2016年（平成28年）7月21日（木）～22日（金）の両日、鳥取県米子市の米子コンベンションセンターにて第25回日本がん転移学会学術集会・総会を開催させていただくことになりました。山陰地方では初めての開催となり、大変光栄に存じますとともに身の引き締まる思いです。

日本がん転移学会は1992年にその前身として日本がん転移研究会が故明渡先生、故鶴尾先生らのご尽力で設立されて以来、がん転移に対して基礎、臨床、企業が協力して学術発表を行い、がん患者さんに研究成果を役立てるという基本理念が受け継がれて来ました。第25回日本がん転移学会学術集会・総会のテーマは「がん転移制御の未来－臨床から基礎へ－」とさせていただきました。臨床の中でも呼吸器内科が担当するのは第15回（平成18年、曾根三郎会長）以来であります。肺は多くのがん転移の標的臓器であり、呼吸器内科医にとっては転移性肺腫瘍の原発巣となり得る全身臓器のがんの理解が必須であります。近年、がんの基礎研究と臨床試験そしてその間を繋ぐ創薬企業の尽力により、基礎研究の成果がよりスピードアップして臨床に応用されるようになってきました。以前には新薬承認まで10年以上の月日がかかっていましたが、EML4-ALK融合遺伝子の発見から治療薬の承認まで僅か4年でした。肺癌の転移病態も遺伝子変異タイプにより異なり、EGFR変異では脳転移が多いのですが、EGFR阻害薬で脳転移が長期間制御されることも経験されます。長年、がんの臨床の現場に身を置く中で、転移病態が大きく変化していることを実感しておりますが、もう一度、臨床側から転移の実態を掘り下げ、基礎研究や創薬に役立つ発表を取り上げたいと考えております。今回の学術集会では広く臨床医が参加できるようにがん転移に関する症例発表の場も設けたいと思います。がん転移症例を一例一例丁寧に検討することで癌転移研究の裾野が広がることも期待しています。本学術集会では臨床、基礎、創薬の各々の立場からご討議いただき、有益な情報交換、学術振興の場所にできればと考えております。

梅雨あけの鳥取県米子市は、暑い時期ではありますが、山陰の夏は都会の夏とは少し異なり、時折さわやかな夏の風を感じることができます。中国地方最高峰の大山をはじめ、白砂青松の皆生温泉、マグロの水揚げ日本一の境港、先日国宝に指定された松江城、庭園世界一の足立美術館、少し離れますが、縁結びの神で有名な出雲大社、日御碕灯台も魅力的です。多くの学会員の皆様に参加いただけることを、御願い申し上げます。

会 期 : 平成28年（2016年）7月21日（木）～22日（金）  
会 場 : 米子コンベンションセンター（米子駅前）  
テーマ : “がん転移制御の未来－臨床から基礎へ－”

## 総会事務

第25回日本がん転移学会学術集会・総会 会長 清水 英治  
〒683-8504 鳥取県米子市西町36-1 鳥取大学 分子制御内科学  
Tel : 0859-34-8104 Fax : 0859-34-8098

【運営事務局】株式会社メッド  
ホームページ 準備中  
E-mail : jamr2016-office@umin.ac.jp

## 第24回日本がん転移学会学術集会・総会を終えて

第24回日本がん転移学会会長 伊藤和幸

盛夏の7/23, 24両日、シテイプラザ大阪にて第24回日本がん転移学会学術集会、総会を開催させて頂きました。1日目は雨、2日目は炎天下というあいにくの天気でしたが、260余名の参加を頂き、無事成功裏に終了する事ができました。会員皆様方の多大なるご支援、ご協力に感謝申し上げます。

日本がん転移学会は、1992年末柘恵一会長（名誉会員）の元、研究会として産声を上げ、その後、学会へと名称変更しましたが（専門医制度とも無縁で）、ただひたすら“がん転移と真摯に向き合う”をスローガンに、基礎、臨床（外科、内科）、創薬が三位一体となった非常にユニークな世界最大の学会です。最初の8年は宝来事務局幹事（功労会員）が、その後16年は小生が事務局を運営しておりますが、各会長のご尽力で、毎年夏の学術集会には多くの会員のご参加を得て楽しいひと時を過ごさせていただいております。初期の頃には、臨床病理の発表が多く、“本当に転移を標的とした治療が可能だろうか？”という基本的な問いかけが多く議論されました。患者がん部のゲノム解析等により標的分子が次々に明らかになり、分子標的治療薬の開発が相次ぎ、今や転移を標的とした薬剤も臨床応用される時代となってきました。そこで、今回のテーマを“がん転移のDriverに迫る”としてプログラムを計画しました。

3つのシンポジウムを開催し、“1-New Driver Candidates for Mets”では、最近病変部位の全ゲノム解析より再び脚光を浴びてきたRho-family GTPasesの浸潤、転移に関する役割に関して、“2-微小に転移に迫る（病理と外科）”では腹膜播種や微小リンパ節転移に関する最近の知見を、“3-骨転移（Bed side to Bench）”ではOroganotropismとしての骨微小環境と骨転移に関して、非会員の研究者も交えながら大いに議論して頂きました。

International symposiumと称した2日目朝のEnglish講演では、本年度の2名の奨励賞受賞者の流暢な発表と、韓国よりお招きしたDr. Kang-Yell ChoiにWntとRas signalingのcross talkをUS Cornell univのDr. Matt Paszekにはglycocalyxに関して講演して頂きました。Muc1が“Giants”として200nmの最高の背丈で細胞膜のdynamicな構造形成に関係するという話は目から鱗のような感じで、もう少し聞きたかったのですが、計画した時間が不足したようで2時間にすべきだったと思います。Workshopsに関しては、会員皆様からの応募を、評議員にお願いしてすべて採点し、各session4つずつとして1題あたり15分とし、十分な発表と議論ができたのではと思います。またPoster sessionは講演会場と同じfloorのホワイエ等を用いたこともあり、例年通り多くの方々が、熱気ムンムンで議論していただき、優秀poster賞を若手研究者9名に授与でき、大変意義がありました。

懇親会では、文化庁の海外文化交流使としてご活躍中の“桂かい枝”師匠に、急作成の高座（実際1m以上の高さがありました）で、英語落語の講演を行っていただき、大変好評を頂きました。何時ものように和気藹々とした感じで、とても良かったと思います。

最後になりましたが、本学会を開催するにあたり、本当に多くの方々のご支援、ご協力を得ました。心より御礼申し上げます。学会屋さんにも頼まず、ホテルの方々和我々事務局3名と知人のみで会を運営した故、ご不便をおかけしたことも多々あったかと存じますが、どうぞご容赦いただければ、それと事務局の島谷さんと笹川君には心から感謝したいと存じます。

来年は、米子で清水会長が第25回をされますので、ぜひ多数の会員の皆様にご参加頂き、熱い議論とマグロで盛り上がりましょう！！

## 第24回日本がん転移学会総会記録

平成27年7月23日（木）評議員会で下記報告事項と議案が審議され、さらに同日の総会において報告・承認された（総会出席者62名、委任状106通）。

### I - 1. 庶務報告

#### 1) 会員状況（平成27年7月16日現在）

顧問：3名                      名誉会員：17名                      功労会員：20名

個人会員：621名                      法人会員：7社

※評議員会において平成27年1月29日に逝去された末舛恵一名誉会員、同年2月11日に逝去された田中健蔵名誉会員、同年3月14日に逝去された螺良英郎名誉会員の黙禱を行った。

### 事業報告

#### 1) 学術集会

平成26年7月10日・11日、金沢市文化ホール・金沢ニューグランドホテルに於いて学術集会を開催

#### 2) 評議員会・総会

平成26年7月10日の学術集会開催時、金沢市文化ホールに於いて評議員会の議を経て平成25年度収支決算・平成26年度予算、第24回副会長清水英治選任を審議決定し、総会にて報告した。

#### 3) 理事会を3回（H26.9.26：横浜、H27.3.20：東京、H27.7.22：大阪）

#### 4) ニューズレターの発行

Vol. 44（平成26年9月）、Vol. 45（平成27年4月）

2. 平成26年度収支決算および監査報告書が提出され承認された（次ページ）。

3. 平成27年度予算（案）が承認された（次ページ）。

4. 平成27年度役員（会長・理事・監事）が承認された（次ページ）。

5. 次期副会長に大阪大学の土岐祐一郎理事が選出された。

6. 第8回会長の入村達郎先生、第11回会長の清木元治先生が名誉会員に、岡田保典先生、小野真弓先生が功労会員に推戴された。

7. 研究奨励賞を2名に授与した。

泉 浩二（金沢大学 泌尿器科）

坂本 毅治（東京大学医科学研究所 人癌病因遺伝子分野）

平成26年度収支決算

(収入の部)

自 平成26年 1月 1日  
至 平成26年12月31日

科 目	予算	決算	差異
年会費	( 4,600,000 )	( 4,613,000 )	( 13,000 )
個人会費	3,000,000	3,013,000	13,000
法人会費	1,600,000	1,600,000	0
預金利息	( 500 )	( 33,985 )	( 33,485 )
普通預金	500	415	△85
定額預金利息		33,570	33,570
収入合計	4,600,500	4,646,985	46,485
繰越金	9,048,980	9,048,980	0
総 計	13,649,480	13,695,980	46,485

(支出の部)

自 平成26年 1月 1日  
至 平成26年12月31日

科 目	予算	決算	差異
事業費	( 2,400,000 )	( 2,400,000 )	( 0 )
学会総会補助費	1,500,000	1,500,000	※ 0
研究推進活動費	500,000	500,000	0
研究奨励賞費	400,000	400,000	0
会議費	( 500,000 )	( 372,250 )	( 127,750 )
理事会等会議費	500,000	372,250	127,750
管理費	( 2,375,000 )	( 2,124,732 )	( 250,268 )
印刷製本費	300,000	234,543	65,457
通信運搬費	35,000	310,595	39,405
消耗品費	50,000	4,212	45,788
給与・手当	1,320,000	1,320,594	△ 594
旅 費	60,000	52,140	7,860
諸 雑 費	50,000	68,375	△ 18,375
賃 貸 料	230,000	134,273	95,727
ホームページ費	15,000	0	15,000
予 備 費	( 1,000,000 )	( 0 )	( 1,000,000 )
支出合計	6,275,000	4,896,982	1,378,018
繰越金	7,374,480	8,798,983	0
総 計	13,649,480	13,695,965	46,485

(財産目録)

自 平成26年 1月 1日  
至 平成26年12月31日

科 目	金 額		
I 資産の部			
流動資産			
普通預金りそな銀行	2,332,533		
郵便振替口座	466,450		
郵便定額預金	6,000,000		
流動資産合計		8,798,983	
資産合計			8,798,983
II 負債の部			
流動負債			
未払金	0		
流動負債合計			0
負債合計			0
正味財産			8,798,983

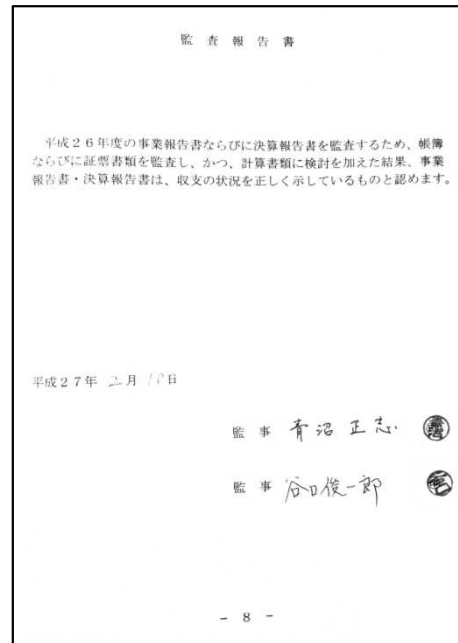
※：平成27年度「第24回日本がん転移学会学術集会(総会)」補助費

平成27年度予算

自 平成27年 1月 1日  
至 平成27年12月31日

科 目	収入予算	科 目	支出予算
年会費	( 4,100,000 )	事業費 ※	( 2,400,000 )
個人会費	2,700,000	学会総会補助費	1,500,000
法人会費	1,400,000	研究推進活動費	500,000
		研究奨励賞費	400,000
預金利息	( 500 )	会議費	( 500,000 )
		理事会等会議費	500,000
		管理費	( 2,330,000 )
		印刷製本費	250,000
		通信運搬費	450,000
		消耗品費	30,000
		給与・手当	1,330,000
		旅 費	20,000
		諸 雑 費	100,000
		賃 貸 料	135,000
		ホームページ費	15,000
		予 備 費	( 500,000 )
			500,000
収支合計	4,100,500		5,730,000
繰越金	8,798,983		7,169,483
総 計	12,899,483		12,899,483

※：平成28年度「第25回日本がん転移学会学術集会(総会)」補助費



名誉会員  
入村達郎、清木元治  
功労会員  
岡田保典、小野真弓

## 寄稿 1：日本がん転移学会と私のがん転移研究

功労会員/岡田 保典（順天堂大学大学院医学研究科）  
（寄附講座「運動器・腫瘍性疾患病態学講座」教授）

このたびは、日本がん転移学会の功労会員にいただき有難うございます。私は、本年3月末日をもって定年を迎え、17年6か月間勤めた慶應義塾大学医学部病理学教授を退任しました。この間、本学会では第1回がん転移研究会の時代から今日まで参加させていただき、がん転移における最先端の研究について勉強させていただくとともに、学会員の多くの先生方にお世話になりました。心より感謝申し上げます。

私の専門である病理学は、基礎医学と臨床医学の架け橋としての機能を担っており、診断病理学や病理解剖を通して日常診療に関わり、一方、基礎医学としての病理学では、種々の疾患における本態の解明を目指して研究しております。私の研究専門分野は、細胞外マトリックス、細胞外マトリックス代謝、組織内微小環境因子代謝、組織破壊とリモデリングに関する研究であり、がんや関節リウマチをはじめとした病的組織の破壊と修復におけるメタロプロテアーゼ（MMPやADAM遺伝子ファミリーメンバー）の役割解析を中心に研究してまいりました。

1980年の初頭にNIHのLance Liotta博士が、Type IV collagenase（後にMMP-2と同一酵素であることが判明）とがん転移の関係やがん転移におけるThree-step theory（すなわち、がん細胞の細胞外マトリックス分解と運動、血管基底膜への接着・分解、血管内への侵入）について提唱するとともに、「がん転移を制することにより80%のがん患者を救うことができる」とのスローガンを掲げた頃に、私自身もがん転移とMMPに関する研究を始めました。当時私は金沢大学医学部病理学講座と医療短期大学部（現保健学科）に所属しておりましたが、幸運なことに、清木元治先生がNIHのLance Liotta博士のところより戻られ、金沢大学がん研究所（現金沢大学がん進展制御研究所）教授として赴任され、一緒に共同研究することとなりました。この間、清木先生や同研究グループの佐藤 博先生（現金沢大学がん進展制御研究所教授）や滝野隆久先生（同准教授）らと共同研究を進め、MMP-2やMMP-9に加え、清木先生のグループが世界に先駆けて見出された膜型MMPのMT1-MMPの研究に参加させていただき、がん転移とMMPの研究を世界に発信できたことは望外の喜びでした。

MMPに関する研究は、世界的なブームになったこともあり、大きく進展しましたが、残念ながらMMP inhibitorを用いたがん転移や関節疾患の治療はこれまで成功していません。そのような経緯の中で、私はMMP近縁遺伝子ファミリーであるADAM分子に注目して、ここ10年近く研究を進め、ADAM28を分子標的とした肺癌治療に向けて現在も研究しております。

第1回がん転移研究会の懇親会で、本学会顧問の杉村 隆先生が、「転移を止めるという治療はまあ無理でしょうね。しかし、まあ頑張ってみてください。」というような趣旨のご挨拶をされたことを覚えております。残念ながら、あれから20年以上経った現在も転移を止める薬剤の開発には成功しておらず、その予言を覆すことできておりません。2012年12月2日付けの日本経済新聞の記事で、20年前の未来予想が当たらなかった例の一つとして、「がんの転移を防ぐ有効な手段の実現」が挙げられています。がん転移研究を進めてきた一研究者としては大変残念に思っておりますが、まだ決して諦めた訳ではありません。今後も本学会の先生方と連携しながら、「がん転移制圧」の実現に向けて一歩でも前進できればと考えております。

今後とも学会員の皆様のご協力をお願いするとともに、本学会の益々のご発展を心より祈念しております。

## 寄稿2：第19回日本がん転移学会奨励賞を受賞して

研究課題：膜型プロテアーゼMT1-MMPによる新規がん悪性化機構の解明

坂本 毅治（東京大学医科学研究所 人癌病因遺伝子分野）

7月23日、24日に開催されました第24回日本がん転移学会学術集会におきまして、第19回日本がん転移学会奨励賞を受賞させて頂きました。このような素晴らしい賞を頂き身に余る光栄です。推薦して頂きました清木元治先生、選考委員の先生方、本会会長の伊藤和幸先生、受賞記念講演で座長をして頂きました横田淳先生、由井理洋先生、本会運営に携わったみなさまにこの場をお借りして厚くお礼申し上げます。

随分昔の話になりますが、私が学部生（獣医学）の頃、外科実習の一環として動物病院で犬のがん手術を見学した際に、腹膜播種で為す術なく手術が終了してしまったのを目の当たりにし、何とか転移を制御することは出来ないだろうか、と転移研究に興味を持ち、博士課程の大学院生として東京大学医科学研究所の清木元治先生の研究室に加わりました。ちょうど私が研究室に加わった年に清木先生ががん転移学会の会長をされていて、研究室員総出で学術集会の運営に携わったことを懐かしく覚えています。当時の私は分子生物学の知識があまりなく、シグナル伝達研究の華々しい時代に学会発表で飛び交う謎のアルファベット3-4文字の大群（安心して下さい、分子の名前です）に、なんだか大変な研究分野に入ってしまったな、と茫然といたしました。

所属研究室では膜型のマトリックスメタロプロテアーゼであるMT1-MMPを中心に研究が行われていて、基本的にはMT1-MMPが細胞外基質や膜タンパクなどを切断することで、がん細胞の浸潤が促進される、というシンプルなスキームでしたので、分子生物学になじみのない私でも何とか議論についていくことが出来ました。清木研究室にはK先生をはじめ個性豊かな人が多く、わいわいとした雰囲気です。自由に研究を行うことが出来ました。私自身の研究テーマですが、清木先生から「何かいろいろやってみて」という壮大なテーマを頂きまして、いくつかのパイロット実験を行った後、がん細胞の転移プロセスのアナロジーとして白血球の炎症部位への集積に着目し、MT1-MMPの炎症細胞での役割を解析することにいたしました。炎症細胞の中では、単球・マクロファージが特異的にMT1-MMPを発現していますが、TPAによる急性炎症モデルでMT1-MMP欠損マウスでは炎症部位へのマクロファージの集積が低下することが分かりました。また、*in vitro*での解析で、MT1-MMP欠損マクロファージはマトリゲルへの浸潤能が低下していることを確認しました。ここまでの結果は予想した通りだったのですが、プロテアーゼ活性に依存しない運動能もMT1-MMP欠損マクロファージでは低下していることがわかり、おもしろい結果だと思いつつも「これはストレートで卒業出来ないな」と途方にくれました（そして実際ストレートで学位を取ることが出来ませんでした）。

その後、「いろいろやってみて」みた結果、MT1-MMPが細胞内領域依存的に低酸素応答性の転写因子HIF-1を通常酸素下で活性化すること、その際Mint3という分子が必要であること、MT1-MMP/Mint3によるHIF-1の活性化によりマクロファージの解糖系を介したATP産生が亢進し、その結果運動能や刺激応答性のサイトカイン産生など細胞機能が亢進することが分かってきました。また、この機構はがん細胞ではWarburg効果の一因として使用されていることがわかり、途中マクロファージの研究ばかりやっていたため受けて来た「がんで研究費取ってきてるんだから、がんやらないとだめじゃない」というボスの無言のプレッシャーからも無事回避することができました。

このように、当初の予想とは違う形で研究が展開していったため直接転移に関わる研究がなかなか出来なかったのですが、MT1-MMP/Mint3によるHIF-1活性化がマクロファージによる転移促進機構に関わるということが明らかになり、ようやく自分も転移研究に携わることが出来大変うれしく思っています。今回の奨励賞受賞を機に初心を忘れず、転移メカニズムの解明に貢献でき

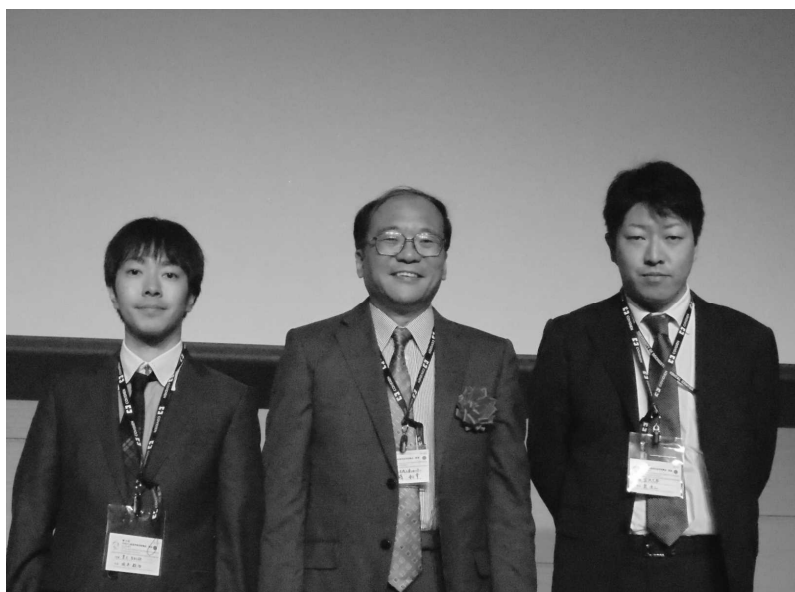
る研究を行っていきたいと思います。また、最終的には自身の研究が何らかの形で社会に貢献できればと思いますので、基礎研究に止まらず、今後は創薬に向けた研究にも展開出来ればと考えています。

最後に、お世話になっています日本がん転移学会の宣伝を。最新の情報がネットで容易に手に入る時代にわざわざ学術集会に参加する利点のひとつは生の情報&人的交流にあると思います。学会場や懇親会で話した先生から実験の細かな情報を教えていただいたり、就職先の情報を教えていただいたりと、ネットでは得られない情報を得ることも出来ます。学会で知り合った先生と共同研究に発展することもありますし、場合によっては人生のパートナーになってくれることもあります（私の場合だけかもしれませんが）。本学会はアットホームな雰囲気以学生の方にとっても比較的発表しやすいと思いますので、日々研究に勤しんでいてなかなか出会いが無いという方々にも是非本学会への参加を積極的に行って頂ければと思います。先生方におかれましては、研究室の若い方々に積極的に本学会への参加・発表の機会を与えて頂ければと存じます。



る研究を行っていきたいと思います。また、最終的には自身の研究が何らかの形で社会に貢献できればと思いますので、基礎研究に止まらず、今後は創薬に向けた研究にも展開出来ればと考えています。

最後に、お世話になっています日本がん転移学会の宣伝を。最新の情報がネットで容易に手に入る時代にわざわざ学術集会に参加する利点のひとつは生の情報&人的交流にあると思います。学会場や懇親会で話した先生から実験の細かな情報を教えていただいたり、就職先の情報を教えていただいたり、ネットでは得られない情報を得ることも出来ます。学会で知り合った先生と共同研究に発展することもありますし、場合によっては人生のパートナーになることもあります（私の場合だけかもしれませんが）。本学会はアットホームな雰囲気です。学生の方にとっても比較的発表しやすいと思いますので、日々研究に勤しんでいてなかなか出会いが無いという方々にも是非本学会への参加を積極的に行って頂ければと思います。先生方におかれましては、研究室の若い方々に積極的に本学会への参加・発表の機会を与えて頂ければと存じます。



### 寄稿3：第19回日本がん転移学会研究奨励賞を受賞して

受賞課題：Androgen-deprivation therapy (ADT)はCCL2産生を増加させ前立腺癌の転移を促進する

泉 浩二（金沢大学大学院医学系集学的治療学/泌尿器科）

この度は、このような素晴らしい賞を頂戴いたしまして、まさに身に余る光栄でございます。第24回日本がん転移学会学術集会会長の伊藤和幸先生をはじめ、受賞講演の座長をしてくださいました横田淳先生、由井理洋先生、選考委員の先生方、そして、ご推薦くださいました、金沢大学がん進展制御研究所・腫瘍内科教授の矢野聖二先生には心より感謝申し上げます。

私が最初ががん転移学会に参加したのは鹿児島で開催された第17回大会で、私の研究を指導していた金沢大学泌尿器科の溝上敦科長からの「おいしいお肉食べに行かないか？」という誘いからでした。当時はがん転移学会のことをほとんど知らないままに参加したのですが、お肉がおいしかったこともさることながら、学会のレベルがとても高く別世界に来たように感じたことが印象に残っています。翌年の旭川での第18回大会では、矢野先生からお誘い頂き、骨転移に関する国際若手研究者の集いに参加させていただきました。ちょうどこの頃、がん薬物療法専門医の資格を取得すべく、矢野先生の教室に研修に行かせていただいております。

外の様々な癌を診療する機会を得ると同時に、矢野先生の教室から発表されるたくさんの研究業績を目の当たりにし、がん転移研究に増々興味が湧き、傾倒していきました。結局その後、ユニークなコンセプトで、緊張感のある雰囲気やレベルの高い研究成果が盛りだくさんのがん転移学会の魅力に引き込まれ、留学していた間に開催された第20、21回大会を除いて、第24回大会まで継続して参加させていただいております。

その私の留学先というのは、溝上科長も留学していたアンドロゲン受容体(AR)研究の第一人者であるChawnshang Chang教授の研究室でした。Chang先生はノーベル賞を受賞したCharles Huggins先生の孫弟子にあたり、自身は1988年にARのクローニングに成功しています(Science 1988;240:324-6)。私が留学したのは2010年からですが、その少し前からラボのARの研究が「前立腺癌の増悪におけるARの役割」から「前立腺以外の組織・細胞におけるARの役割」や「ARによる前立腺癌転移抑制機構」へとシフトし始めていました。たまたま私がラボに行ったときに免疫を専門としていたPIのWenJye Lin先生が人手を欲しがっていたとのことで私はLin先生とともに「前立腺癌とマクロファージのARと転移」の研究を行うことになったというわけです。私にとって幸いだったことは、たくさんの台湾人の同僚が研究や生活面でサポートしてくれたということでした。当時Chang先生のラボにいた台湾人のほとんどが現在ポスドクとなって、米国内や台湾などのラボに移って研究を続けていますが、今でも何人かとは共同研究を行っております。

さて、私の所属する教室について大変恐縮ではございますが、この紙面をお借りいたしまして紹介させていただきたいと思っております。現在私たちの教室では、泌尿器癌のがん転移を完全制圧すべく、様々な取り組みを行っております。教室の名称が「(がん医科学専攻) 集学的治療学」とされておりますとおり、多角的に臨床・研究にアプローチしております。転移性腎細胞癌におきましては、可能な限り手術で原発巣も転移巣も摘除し、個々の患者に最も適したサイトカイン療法や分子標的治療を行います。最良の逐次薬物療法を明らかにする目的でESCAPE studyという多施設共同第3相試験を当教室が中心となって行っております。局所進行膀胱癌では術前化学療法と膀胱全摘除術が標準治療ですが、転移に対する手術の有効性や、バイオマーカーについての研究も行っております。前立腺癌では、去勢抵抗性前立腺癌に対するエンザルタミドとアピラテロンの有効性を明らかにする目的でENABLE studyという多施設共同第3相試験を当教室が中心となって行っております。基礎研究では、現在溝上科長とともに2人の大学院生、私とともに3人の大学院生(うち2人はウィグルとモンゴルからの留学生)が、前立腺癌の転移促進機構を明らかにすべく日夜研究に没頭しております。

大学院生が研究の成果を挙げたあかつきには「おいしいお梨食べに行かないか?」と誘ってみたいと思っております。

がん転移学会の会員の先生方には、これからもご指導のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

### 第26回日本がん転移学会学術集会・総会の

会 期 : 平成29年(2017年)7月27日(木)~28日(金)

会 場 : 大阪国際会議場(予定)

会 長 : 土岐 祐一郎(大阪大学 消化器外科)

# 日本がん転移学会会則

## 第1章 会の名称

第1条 本会を「日本がん転移学会」“The Japanese Association for Metastasis Research”と称する。

## 第2章 目的および事業

第2条 本会は、がん転移による死亡率を減少せしめるべく、基礎、臨床、開発（薬剤、機器等）研究を通じて実質的討議を行い、がん転移研究の発展、診断・治療の進歩普及に貢献する事を目的とする。

第3条 本会は、前条の目的達成のため、次の事業を行う。

- (1) 学術集会を少なくとも年に1回開催
- (2) がん転移に関する研究発表、情報交換、資料の収集、教育及び研修
- (3) 本分野に関して海外研究者との連携
- (4) その他本会の目的達成に必要な事業

第4条 本会の事務局は、大阪市東成区中道1丁目3番3号、大阪府立成人病センター内に置く。

## 第3章 会員

第5条 会員は、本会の趣旨に賛同し、評議員、顧問あるいは名誉会員の推薦を受け、理事会の承認を得て入会した個人ならびに法人（法人格のない団体を含む）とする。

第6条 会員である法人の取扱いは次による。

1. 法人に所属する個人はその法人の承認を得れば本会の事業に参加できる。
2. 前項により参加する個人からは年会費を徴収しない。
3. 会員である法人は登録者3名迄と会計事務担当者1名（兼任も可）を決め事務局に届出なければならない。

第7条 会員は評議員会において別に定める会費を納入しなければならない。

第8条 引きつづき2年以上会費を滞納したものは評議員会の議により、その資格を喪失する。

第9条 顧問は理事会にて推薦、評議員会にて承認を受ける。また、本会に対して特に功労のあった者は、名誉会員・功労会員として理事会にて推薦、評議員会にて承認を受ける。顧問・名誉会員・功労会員は本会の発展のために適切な助言をする。顧問・名誉会員・功労会員は会費を要しない。

## 第4章 役員および役員会

第10条 本会に会長1名、副会長1名、若干名の理事ならびに評議員、監事2名、事務局幹事1名を置く。

\* 事務局幹事は会長が任命し、会長及び理事会の事務を補佐する。

第11条 会長は本会を統括し、理事会・評議員会では議長となる。副会長は、次期会長がこれを務め、会長を補佐し会長に事故のある場合はその職務を代行する。会長・副会長の任期は1年とする。

第12条 理事は評議員会にて、評議員の中から選任される。任期は3年とし、任期終了後1年間は再選されない。理事は会長を補佐し日常の会務について決定し、執行する。理事会の構成は、会長・副会長・理事および前会長とする。理事会は構成員の2/3以上の出席（但し委任状を提出した人は出席とみなす）により成立し、議決は出席者の過半数をもって決する。

第13条 評議員は会員の中から選出される。評議員の任期は3年とし、再任は妨げない。評議員会は会の運営に関する重要事項を審議決定する。評議員会は評議員の1/2以上の出席（但し委任状を提出した人は出席とみなす）をもって成立し、議決は出席者の過半数をもって決し、可否同数のときは議長の決するところによる。

第14条 監事は評議員の中から選出される。監事の任期は1年とし、再任は妨げない。監事は本会の会計および会務を監査し、理事会・評議員会にて報告する。

第15条 次期会長・理事・評議員・監事の選出は日本がん転移学会役員選任規程に基づく。

## 第5章 総会および学術集会

第16条 総会は毎年1回学術集会の時期に会長が招集し、総会の議長となって次の議事を行う。

1. 会務の報告
2. 会長が必要と認める事項

総会の議事は出席者の過半数によって決する。可否同数のときは議長の決するところによる。

第17条 会長が必要と認めたときは評議員会の議を経て、臨時総会を随時開催することができる。臨時総会の議案は定期総会に準ずるものとする。

第18条 学術集会は毎年1回会長が主宰し、研究発表、意見交換を行う。

第19条 本会会則第2章第3条の4の規定に基づき各種の委員会を設けることができる。委員会の設置、その構成及び運営方法は、理事会において討議し、評議委員会にて承認する。また会の目的を達成するための具体的、実質的討議を行うため、研究推進会議(班)を設置することができる。その構成及び運営方法は理事会において討議し、評議委員会にて承認する。研究推進活動の経過については、学術集会で報告する。

#### 第6章 会計

第20条 本会の経費は会員が拠出する会費ならびに協賛金等をもってこれにあてる。

第21条 毎年度収支決算は会長が作成し、監事の監査を受け、評議委員会の承認を得て、毎年総会において報告する。

第22条 会計年度は毎年1月1日に始まり12月31日に終わる。

#### 第7章 会則の変更

第23条 本会会則の変更は理事会、評議委員会および総会において、各々出席構成員の2/3以上の承認を得なければならない。付則

本会則は平成12年7月1日よりこれを実施する。本会則は平成14年6月8日一部改正した。本会則は平成18年9月3日一部改正した。

### 日本がん転移学会役員選任規程

#### 第1章 役員を選任

第1条 会則第15条により次期会長(副会長)・理事・評議員および監事は本規定に基づき選出される。なお、役員は65歳をもって定年とする。

#### 第2章 次期会長(副会長)の選出方法

第2条 次期会長の選出に際しては、評議員全員に告示する。候補者は所定の様式で抱負を述べた資料を理事会に提出し、理事会はこれを討議し候補者1名を推薦する。

第3条 次期会長の選出は評議委員会で行う。

#### 第3章 理事の定数と選出方法

第4条 理事の定数は個人評議員より約6名(原則として基礎3名、臨床3名)、法人評議員より約2名とする。

第5条 理事は会則第12条により評議員の中から選出される。

第6条 個人会員理事は評議員の選挙により選出される。候補者は所定の様式で抱負を述べた資料を評議委員会に提出する。

第7条 法人会員理事は理事の選挙により選出される。

#### 第4章 評議員の選出方法

第8条 評議員は会則第13条により会員の中から選出される。

第9条 評議員の選出は理事会で行う。

第10条 個人評議員は、一定の条件(細則に定める)を満たす者とする。

第11条 個人評議員の候補者は所定の様式による資料を本会事務局に届け出ること。

第12条 法人会員評議員は理事会で選出する。

#### 第5章 監事の選出方法

第13条 監事は会則第14条により評議員の中から選出される。

第14条 監事の選出は理事会で行う。

付則 1. 理事選挙の施行は次期評議員が選出された(平成15年度)以降とする。

2. 本役員選任規程は平成14年6月8日よりこれを実施する。本役員選任規程は平成15年6月29日一部改正。

3. 本規程の変更は理事会および評議委員会において、各々出席構成員の2/3以上の承認を得なければならない。

4. 役員任期は、65歳になる年の12月末で終了する。

#### 日本がん転移学会役員選任規程細則

##### 1. 個人会員理事の選出方法

1) 投票は原則として郵送とする。

2) 評議員は基礎系候補・臨床系候補に各1票投票する。

##### 2. 個人評議員の選出条件

1) 原則として3年以上本会会員であり、会費を完納していること。

2) 本会や関連学会、学術雑誌などですぐれた評価を受けていること。

##### 3. 評議員の資格

1) 3年連続して評議委員会を欠席した者はその資格を喪失する。

## 日本がん転移学会 顧問・名誉会員

顧問：菅野 晴夫	杉村 隆	(故)明渡 均	
名誉会員：愛甲 孝	入村 達郎	小林 博	(故)佐藤 春郎
(故)末舛 恵一	清木 元治	曾根 三郎	(故)田中 健蔵
田原 榮一	塚越 茂	(故)鶴尾 隆	新津 洋司郎
(故)螺良 英郎	(故)中村 久也	(故)磨伊 正義	宮坂 昌之
門田 守人	渡辺 寛	Isaiah J. Fidler	
功労会員：東 市郎	(故)阿部 薫	(故)尾形 悦郎	岡田 保典
小野 真弓	垣添 忠生	北島 政樹	(故)久保田 哲朗
久保田 俊一郎	桑野 信彦	佐治 重豊	清水 暁
高橋 俊雄	竜田 正晴	寺田 雅昭	豊島久真男
(故)馬場 正三	宝来 威	細川 真澄男	宮城 妙子
宮崎 香	武藤 徹一郎		

## 日本がん転移学会役員

会長：清水 英治 (25回)			
副会長：土岐 祐一郎			
前会長：伊藤 和幸			
理事：川田 学	越川 直彦	清水 英治	土岐 祐一郎
夏越 祥次	二口 充	第一三共(株)	大鵬薬品工業(株)
監事：太田 哲生	エーザイ(株)		
評議員：足立 靖	板野 直樹	伊藤 壽記	伊東 文生
井上 正宏	植田 政嗣	上原 久典	海野 倫明
大上 直秀	岡田 太	奥野 清隆	片岡 寛章
加藤 淳二	神奈木 玲児	北川 透	北川 雄光
北台 靖彦	国安 弘基	隈元 謙介	小泉 桂一
小林 浩	今野 弘之	濟木 育夫	堺 隆一
佐藤 博	澤田 鉄二	高橋 豊	滝野 隆久
竹田 和由	竹之下 誠一	田中 稔之	田中 紀子
谷口 俊一郎	中津川 重一	中森 正二	西岡 安彦
西村 行生	馬場 秀夫	浜田 淳一	早川 芳弘
東 伸昭	樋田 京子	藤田 直也	松浦 成昭
三森 功士	向田 直史	森 正樹	八代 正和
安井 弥	安本 和生	柳川 天志	矢野 聖二
山本 博幸	矢守 隆夫	横崎 宏	横田 淳
横山 省三	吉治 仁志	渡邊 昌彦	
旭硝子(株)	協和発酵キリン(株)	中外製薬(株)	日本化薬(株)

(アイウエオ順)

事務局幹事：伊藤 和幸

(法人評議員については登録会員の中から各社より各1名選任される)  
評議員任期：平成27年7月25日～平成30年/第27回総会まで  
(第25-27回)

日本がん転移学会事務局 宛  
Fax : 06-6971-7951

## 日本がん転移学会連絡用紙

日本がん転移学会会員の種々の変更・退会等の連絡はこの用紙をご利用ください。  
会員番号(郵便物の宛名ラベルに印刷してある貴氏名の右下の数字)、並びにご氏名(フリガナ)を明記の上、  
変更したい事項をご記入いただき、封書またはFax、E-mailにてご連絡ください。

年 月 日

### 住所等変更 ・ 退会 届

(上記、どちらかを○で囲んでください)

(フリガナ)	会員番号
氏名	生年月日
勤務先名称(部所属も記入してください)	
〒	
Tel	Fax
E-mail	
自宅	
〒	
Tel	Fax
E-mail	
雑誌等送付先を○で囲んでください。 勤務先 ・ 自宅	
変更年月日	201 年 月 日 付で変更します
退会届	201 年 月 日 付でもって退会します
その他	

※個人情報について

会員への連絡、会誌等の発送等、学会活動の目的に限定して利用します。

=====  
[発行・編集]  
日本がん転移学会事務局  
Tel/Fax 06-6971-7951 (直通)  
E-mail: office-jamr@umin.ac.jp  
〒537-8511  
大阪市東成区中道1-3-3  
大阪府立成人病センター内  
=====

2015.10